

# 学位申請論文要旨

## 『ウイグル文慈恩宗唯識文献の研究』

橘堂晃一

### 目次

#### 第一部：研究編

- 1 ウイグル文 慈恩宗唯識典籍研究史
  - 1・1 概観
  - 1・2 『妙法蓮華経玄賛』
  - 1・3 『大乘法苑義林章』
  - 1・4 『大乘入道次第』
  - 1・5 その他
    - 1・5・1 Pelliot Ouïgour 4521
    - 1・5・2 「心性を顕かにする経」 (*köngül tözin uqitdači nom*)
    - 1・5・3 『金光明最勝王経』 (*Altun Yaruq*)
    - 1・5・4 唯識三十頌注釈書
- 2 ウイグル文 慈恩宗唯識文献 (*Lehrtext*)
  - 2・1 資料の所在
  - 2・2 *Lehrtext* の構成とタイトル
- 3 第18章
  - 3・1 写本の体裁
  - 3・2 第18章の内容
  - 3・3 「四因」について
  - 3・4 菩薩が退転する諸相について
  - 3・5 福智資糧としての六波羅蜜行
  - 3・6 ウイグル文翻訳者が参照したテキストの言語
- 4 第19章
  - 4・1 写本の体裁
  - 4・2 第19章の内容
  - 4・3 妙法蓮華経玄賛抄
- 5 第20章
  - 5・1 ウイグル文「華嚴経」研究史

- 5・2 写本の体裁
- 5・3 十行・十廻向の名称
- 5・4 対応する文章
- 5・5 取意・潤文
- 5・6 原典にはない挿入文
- 5・7 省略
- 5・8 訳語の多様性
- 5・9 第20章の性格
- 6 第21章
  - 6・1 写本の体裁
  - 6・2 第21章の内容
  - 6・3 『唯識三十論頌』の頌について
  - 6・4 ウイグル文「法華玄賛」との関係
- 7 第22章
- 8 章番号不明
  - 8・1 写本の体裁
  - 8・2 本章の内容
  - 8・3 *Lehrtext* としての「上生賛」
- 9 第30章
  - 9・1 概観
  - 9・2 写本の体裁
  - 9・3 第30章の内容
    - 9・3・1 三量について
    - 9・3・2 中国への仏教初伝
    - 9・3・4 曇摩難提と崔殷禮
    - 9・3・5 渡天・取経・訳経への讃嘆
    - 9・3・6 八大霊塔について
  - 9・4 文構造の対称性
  - 9・5 注釈方法について
  - 9・6 第30章の性格
  - 9・7 第30章は翻訳本かそれとも撰述か
- 10 「菩薩修行道」(Pelliot Ouïgour 4521)の再検討
  - 10・1 ウイグル文「サダープラルディタ菩薩とダルモードガタ菩薩の物語」
  - 10・2 「菩薩修行道」と *Lehrtext*
  - 10・3 *Altun Yaruq* に挿入された唯識説
  - 10・4 「菩薩修行道」の典拠と他のウイグル語文献との平行文

## 11 ウイグル文唯識文献に使用される仏教術語の抽出と比較

- 11・1 唯識文献に特有の術語
- 11・2 アビダルマ文献と共通する術語
- 11・3 アビダルマ文献と異なる術語

## 12 *Lehrtext* の史的背景

- 12・1 玄奘とトルファン
- 12・2 敦煌で活動した唯識学僧・曇曠の影響
- 12・3 敦煌仏教以外の影響
- 12・4 契丹版大蔵経のトルファンへの流布
- 12・5 トルファンより出土した証明の著作

## 13 結語

## 14 コンコーダンス

附論 大谷探検隊将来ウイグル文『大乘入道次第』残葉

略号表

参考文献

## 第二部：資料編

- 1 テキストと和訳
- 2 注釈
- 3 語彙索引
- 4 図版

## 概 要

10世紀～14世紀にかけて天山山脈東麓のオアシスに定住したウイグル人は、篤く仏教を信奉した。トカラ仏教とならんで、中国仏教の影響を強く被っており、漢文仏典からウイグル語へと翻訳されていることは、その一端を表明している。

ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー・トルファン研究所(BBAW Turfanforschung)は、多くのトルファン出土のウイグル語仏典資料を収蔵する。その中に *Lehrtext* (教義書) と称される、これまでほとんど手つかずのままになっていた断片約200点がある。本研究は、これらの資料の解読と復元を通じて、ウイグル仏教の一端を解明しようとするものである。

Web上で公開されている写本のデジタル画像からテキストを事前に作成し、2011年にはトルファン研究所の協力を得て、対象となる写本の全てを閲覧することができた。これにより各断片の位置関係を確定し、テキストの全体を復元するという所期の目的は達成する

ことができた。復元されたテキストは4000行を超える。これはウイグル語文献としては決して少ない数ではない。本研究ではこのテキストを所蔵機関での通称に従って *Lehrtext* と呼ぶことにする。

復元したテキストの分析を通じて、これらが中国慈恩宗に属する唯識文献であることを論証する。周知のとおり慈恩宗は、瑜伽行唯識派の教義体系をナーランダー寺院で学んだ玄奘を鼻祖とし、その高足であった大乘基（窺基：632-682年）を開基とする。基は「百本疏主」と称されるごとく、多くの經典に注釈を加えており、その影響は学僧のみならず、「講經」といった大衆文化にまで及んでいる。本文献は慈恩宗の西への伝播を跡付けると同時に、ウイグル仏教の水準の指標となる貴重な資料である。

本研究は二部構成となっている。復元テキスト、和訳、注釈、語彙集、図版を第二部「資料編」で提示する。それに対する解説と分析を示したのが、第一部「研究編」である。

冒頭で、ウイグル文の慈恩宗に属する典籍の研究史に概観を加える。現在までに判明している。現在までに判明しているのは、『妙法蓮華經玄贊』、『大乘法苑義林章』、(擬)「菩薩修行道」,「唯識三十頌」の注釈であった。本研究はこれらの成果を踏まえて、*Lehrtext* のウイグル仏教における位置づけを試みる。

続いて「研究編」第3章～9章で、復元の妥当性を解説し、内容の分析を行った。*Lehrtext* は、第18章、19章、20章、21章、22章、30章と章番号不明の章のテキストを復元できる。第30章を除いた他の章では、菩薩の修道論が説かれている。結論から言えば、*Lehrtext* は、第18章から唯識教義に基づいた修道論が展開されるが、それは基本的に『成唯識論』に説かれる修道体系に忠実に沿ったものである。以下、各章の内容を簡単に示したい。

#### 【第18章】

第18章は複数の論書からの抜粋文を任意に組み合わせることによって構成される。それは決して無秩序なものではなく、三つの主題に適合する内容を組み合わせている。その主題とは、残存する内容から判断して、①菩薩が初めて発心する条件としての「四因」、②発心した菩薩が退屈する諸相、③菩薩が修道すべき「六波羅蜜」である。智周の『大乘入道次第』は「菩薩の發心せるは四種緣・四因・四力に由りて而して能く發心す」としている。さらに③は資糧位にある菩薩が行すべき福智の資糧、すなわち六波羅蜜・三十七菩提分法・四摂事・四無量心が解説される。なお下敷きとなっているのは『大乘入道次第』の内容である。

#### 【第19章】

全ての断片は、僅かに2, 3行を残すのみで状態は良好とはいえない。しかし幸いにもいずれも帖付を保存しており、19章の第5葉から第12葉までを確認することができる。第6葉と7葉には、唯識教義の支柱となる「三性説」の内の「遍計所執性」と「依他

起性」に対応するウイグル訳を確認できる。すなわち、遍計所執性は、*alquni atqandači-qa [adqanyuluq töz]* がこれにあたり、依他起性に対しては *adınlar tayaqınga turmiş töz* が在証される。わずかな情報から第 19 章の全容を把握することは不可能である。しかし少なくとも第 19 章の後半部分に四十心のうちの後半の「十行」と「十廻向」が説かれていることから考えれば、第 19 章には前半分である「十信」と「十住」が説かれていた可能性は高い。

#### 【第 20 章】

第 20 章では、十行と十廻向が驚くほど詳細に解説されている。しかしそれは慈恩宗の論書あるいは註釈書からの引用ではなく、于闐出身の実叉難駄陀 (*Śikṣānanda*) 訳の『大方広仏華嚴経』の十行品 (巻第十九, 二十) と十廻向品 (巻第二十三～巻第三十二) を依用している。興味深いことに、既に知られているウイグル文「華嚴経」とは、訳語や訳出方法に違いがみられるため、この文献の成書にあたって、漢訳から翻訳された可能性が高い。

#### 【第 21 章】

最も状態の良い写本を保存しており、まとまったコンテキストを復元できる。第 19 章と第 20 章で資糧位の四十心が解説されたので、ここからは加行位の解説に入る。加行位とは「前の十廻向の第十法界無量廻向位の満心において、唯識の実性に住せんと求める四善根位」を言う。*Lehrtext* の第 21 章は、専ら『成唯識論』と『成唯識論述記』に依拠しながらも、それに頼りきることなく難解な教理を平易にまとめあげている点は、ウイグル翻訳僧の理解度の高さを示す。

#### 【第 22 章】

わずかに U 1343, U1354, U 1355 の 3 葉分が残存する。デジタル資料からは判読しづらいが、原写本を閲覧して U 1343 と U 1354 の帖付がそれぞれ *iki ot[uz]* (二十二) と読めることから「第二十二章」であることを確認できた。U 1355 には帖付は残っていないが、形状と書体に基づき第 22 章と判断した。

ただし、いずれも断片的で内容を特定することは不可能であり、各章の内容と全体のコンテキストから推測せざるをえない。第 21 章が加行位の解説に費やされていることから、第 22 章では、五位のうち第三の通達位 (見道位) が解説されていると推測した。

#### 【章番号不明】

Main 6, Mainz 26, Mainz 76, Mainz 77, Mainz 78 の 5 断片 (4 葉分に相当) は、慈恩大師基の『観弥勒菩薩上生兜率天経賛』 (以下、「上生賛」) のウイグル訳である。2010 年 9 月に写本を実見する機会に恵まれ、*Lehrtext* と紙質、界幅、行間など法量を比較してみたところ、写本の体裁上、完全に一致することが判明した。したがってこれは単独の翻訳ではなく、*Lehrtext* の一部であると認定した。その場合、章数を欠落するこの章

をどこに置くかが問題となる。『成唯識論』の構成と比較すると、「仏身」は最後の巻第十に説かれていることに鑑みて、これを *Lehrtext* の本論としての最終章に配当した。

### 【第30章】

第30章は、玄奘（602–664年）の求法の足跡とその功績とを、注釈文を交えながら讃嘆する、*Lehrtext* の中でもとりわけ異彩を放っている章である。玄奘の伝記としては『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（以下「慈恩伝」とする）があり、これはウイグル文にも翻訳されている。Šingqo Šäli Tutung（勝光阿闍梨都統）によって翻訳された *bodistv taito samtso ačariniŋ yoriyün uqıtmaq atlıy tsi-en-čüen tegmä kävi nom bitig*（菩薩大唐三蔵阿闍梨の行いを顕らかにすると名付ける慈恩伝という詩誦）がそれである。本章はウイグル文「慈恩伝」の文章に対する注釈であることがまず想定されるであろう。しかしながら第30章は「慈恩伝」に記される玄奘の事績を踏まえているものの、漢文・ウイグル文「慈恩伝」のいずれとも一致しない。とりわけ注目されるのは、注釈形式を取っている点である。本章は *Lehrtext* の本文を終えた後に、玄奘への讃歎として挿入したものとみられる。

以上がこれまでに判明している *Lehrtext* の内容である。

第10章では、庄垣内正弘氏によって解説された「菩薩修行道」との比較を行い、この文献が *Lehrtext* の成立と密接な関係にあることを明らかにする。

第11章では、*Lehrtext* に使用される仏教術語を他のウイグル仏教文献、とくにアビダルマ文献の術語との比較を行し、両者が異なる翻訳グループに属することを明らかにする。*Lehrtext* は、「慈恩伝」や『金光明最勝王経 (*Altun Yaruq*)』を訳出した勝光阿闍梨都統の訳語に共通性を持つことを提示する。

第12章では、ウイグル仏教における慈恩宗文献の意義について、慈恩宗の東アジア世界での展開の中で考える。その場合、重要となるのは敦煌仏教と契丹（遼）仏教がウイグル仏教に影響を与えていること指摘する。

以上より *Lehrtext* は『成唯識論』の教義体系に沿いつつ、他の慈恩宗唯識文献を縦横に駆使し説き明かした、いわば慈恩宗聖典の集成のごとき性格をもつものであると結論できる。さらに勝光阿闍梨都統の翻訳グループに属しており、難解な教義体系を持つ慈恩宗がウイグル仏教社会に一定の影響をもっていたことを明らかにすることができた。また本資料から回収される仏教術語は、新たな慈恩宗文献の発見に寄与するであろう。附論の大谷探検隊将来のウイグル語断片の解説はその成果である。

なお本研究は、英語に翻訳の上、ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー (BBAW) のトルファン研究所 (Turfanforschung) の Berliner Turfantexte シリーズとして公刊の予定である。